

地域を守る精神

谷口吉光（秋田県立大学）

本欄で何度か紹介してきた能代松陽高校生との「トランジション・ゼミナール」は 12 月 23 日に最後のゼミを終えました（本紙 12 月 26 日に掲載）。高校生と一緒にトランジションを考えるゼミというのはおそらく全国初の試みです。毎回のゼミをどうやって進めたらいいのか。一緒に担当した総合地球環境学研究所の太田和彦さんといつも長い議論をしました。

私たちの立場は「現在の大量生産大量消費社会は破滅に向かっている。このまま放っておけば、数十年のうちにとんでもないことになる。だから破滅を回避するために、持続可能な社会に転換しなければならない」というものです。

「破滅」には異常気象による大災害、食料不足による飢餓、伝染病の蔓延などが考えられますが、身近な例では増田寛也さんらが『地方消滅』で描いた「人口減少によって、2040 年までに秋田県のほとんどの市町村は消滅している可能性がある」という予測があります。2040 年まであと 22 年しかありません。22 年後には能代市という地方自治体は成り立たなくなつて「消えているかもしれない」というのです。現在の常識ではとても信じられないでしょうが、私たちは「その可能性はある」と思っています。

それではこうした破滅への道を避け、「持続可能な能代」（つまり、いつまでも永続する能代）を実現するにはどうしたらいいのでしょうか。これがトランジションゼミのテーマでした。高校生という多感な世代と、どうしたらこの難しいテーマを一緒に考えてもらうことができるか。模索が始まりました。

悲観的な話ばかりでは若者たちはそっぽを向いてしまうだろうと考え、まず「30 年後の理想の自分の姿を考えて下さい」と問いかけました。未来について明るい（ポジティブな）イメージを持ってもらおうと考えたわけです。次に「その 30 年後の理想の自分がどんな食事をしたいかを絵に描いて下さい」と言いました。生徒たちはさまざまな食事の絵を描いてきましたが、使われている食材を見ると、米、野菜、肉など今食べているものとはほぼ同じでした。ということは、30 年後に理想の食事をするためには、今食べている食材が手に入らなければならないという理屈になります。

そこで、「30 年後に理想の食事をするためには、地域の農業や食べものの流通がどうなっていないかはいけないだろうか」と問いかけたのです。生徒たちはおそらく生まれて初めて、地域の農業や食について考え始めました。2 回のフィールドワークで園芸メガ団地、地元スーパーや直売所を回り、そこで得た知識を使って、「地域の農業と食が存続するためのビジョンとプランを作る」という課題に取り組みました。

最終ゼミでは、生徒たち全員が順番に自分の考えたビジョンとプランを発表しました。発表はどれもとてもよかったです。内容はもちろん、彼らが地域の未来を真剣に考えていることが私の胸に伝わってきました。「地域を守る精神」という言葉が私の心に浮かんできました。生徒たちの心に、「自分たちの力で地域を守らなければならない」という気持ちが芽生えてきたのではないか。それこそが持続可能な社会に転換するために最も必要なものではないか。ゼミを終えた今、この精神をどうしたらもっと発展させられるだろうかと考えているところです。